

大谷いづみ先生，坂田謙司先生，柳澤伸司先生，山口歩先生， リムボン先生の定年ご退職にあたって

産業社会学部長 黒田 学
社会学研究科長 市井 吉興

この度、大谷いづみ先生、坂田謙司先生、柳澤伸司先生、山口歩先生、リムボン先生の定年ご退職を迎えるにあたり、産業社会学部・社会学研究科を代表して、挨拶をさせていただきます。

大谷先生は18年間、坂田先生は21年間、柳澤先生は32年間、山口先生は30年間、リム先生は32年間、産業社会学部・大学院社会学研究科での教育・研究活動等を通じて立命館大学全体の教学発展に貢献され、多くの卒業生・修了生を社会に輩出してこられました。以下、それぞれの先生のご経歴を簡単に紹介させていただきます。

大谷先生は、生命倫理学を専門とされ、安楽死・生命倫理学・死生学の日本導入史、「生・老・病・死」の言説構造の解析と組み替えを研究課題として研究に従事されてきました。近著では、共著として、『見捨てられる〈いのち〉を考える——京都 ALS 囑託殺人と人工呼吸器トリアージから』において、「〈間〉の生を聴く／〈間〉の生を語る」を執筆され、現代社会における生命の捉え方について言及されています。また、本学生存学研究所長を務められた立岩真也『良い死／唯の生』では、解説「それぞれの『良い死／唯の生』」を執筆されています。

また、先生は、主な学内役職として、生存学研究センター運営委員、生存学研究所副所長、同所長を歴任され、本学における研究活動にご貢献いただきました。

坂田先生は、メディア社会研究を専門とされ、世代間交流における地域ラジオの活用、地域とラジオの接点は何か、地域独自の音声メディアの歴史を掘り起こす、記憶共有と地域ラジオの接点を研究課題として研究に従事されてきました。最新刊では、単著『「音」と「声」の社会史—見えない音と社会のつながりを観る』を執筆されています。その他、「地域の人びとの欲求がメディアを作る—ローカルな音声メディア史からみる『声』の存在」を執筆され、地域独自の音声メディアの歴史に関わる研究など、多数の著書、論文を執筆されています。

また、先生は、主な学内役職として、全学ではサービ斯拉ーニング副センター長、同センター長を、学部では学生主事、メディア社会専攻・専攻長を務められ、全学および学部の教学にご尽力いただきました。

柳澤先生は、ジャーナリズム論を専門とされ、ジャーナリズム、NIE（新聞利用学習）、メディア・リテラシーを研究課題として研究に従事されてきました。近著では、「メディアの活用～誰もが情報に権利と責任を持つ時代～」(『18歳からの学びを拓く』所収)、「学校新聞は民主社会の担い手づくり」(『探求の学びを拓く NIE—多様性の中の確かな指針として—』所収)を執筆されるなど、多くの著書や論文を発表なさいました。

また、先生は、主な学内役職として、学生主事、副学部長、メディア社会専攻・専攻長を歴任され、学部教学のためにご尽力いただきました。

山口先生は、産業技術論を専門とされ、日本における工作機械の発展に関する研究を出発点としながら、環境問題にも研究の射程を広げ、リサイクル技術や風力発電技術の研究を精力的に展開されました。たとえば、「日本におけるリサイクル技術の現状と課題」、「現代の風力発電技術の「経済性」について:1980年代におけるデンマークの風力発電機をめぐって」、「風力発電技術を支える日本の社会条件」といった論文を発表されております。

また、先生は、主な学内役職として、生涯学習担当主事、副学部長、現代社会専攻・専攻長などを歴任され、学部教学のためにご尽力いただきました。

リム先生は、都市政策や都市計画を専門とされ、「モザイク」という概念を用いて、都市の局地的住環境特性を把握するための分析方法を確立し、実効性の高い住宅供給システムを開発されてきました。これまでも先生は『歴史都市・京都の超再生:町家が蠢く、環境・人権・平和のための都市政策』(日本評論社、2012年)など、多くの著書や論文を発表なされました。

また、先生は、主な学内役職や全学役職として、生涯学習担当主事、調査企画室長を歴任され、産業社会学部ならず、立命館大学全体の教学のためにご尽力いただきました。

5名の先生方は、それぞれ在籍された期間や専門領域が異なりますが、その専門性と研究を通じて、立命館大学内外で研究活動、社会活動にご尽力され、ご貢献頂きました。とりわけ、「現代化・総合化・共同化」に基づく学部・大学院教学の中心として、その充実と発展にお力を傾注されました。現代社会の様々な課題に対する鋭い考察と言及を通じて、現代社会の様相に警鐘をならすと共に、私たちが目指すべき社会の方向性を示唆されています。私たちは、先生方の学内外での研究と教育、社会貢献された足跡、学問に対する真摯な姿勢と識見を継承し、発展させていくことが、後進である私たちの先生方に対する感謝の証となるものと考えます。先生方、長年にわたり本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、先生方のますますのご活躍とご健康、ご多幸を心より祈念申し上げます。

2025年 5 月